出雲市

日本遺産ガイドブック

日が沈む聖地出雲

～神が創り出した地の夕日を巡る～

Izumo-City Japan Heritage Guidebook

出雲市 **日本遺産ガイドブック**

日が沈む聖地出雲 ～神が創り出した地の夕日を巡る～

夕日を敬い　夕日に祈る
夕日を見つめ　夕日に願う
昔も今も　変わらぬ風景（さま）が　ここにある

目　次

4　神話のふるさと　出雲

6　日本遺産のストーリー

10　構成文化財一覧

12　構成文化財紹介
　稲佐の浜エリア

18　　薗の長浜エリア

22　　大社エリア

28　　日御碕エリア

40　　宇龍・鷺浦・猪目エリア

46　出雲市観光マップ

神話のふるさと 出雲

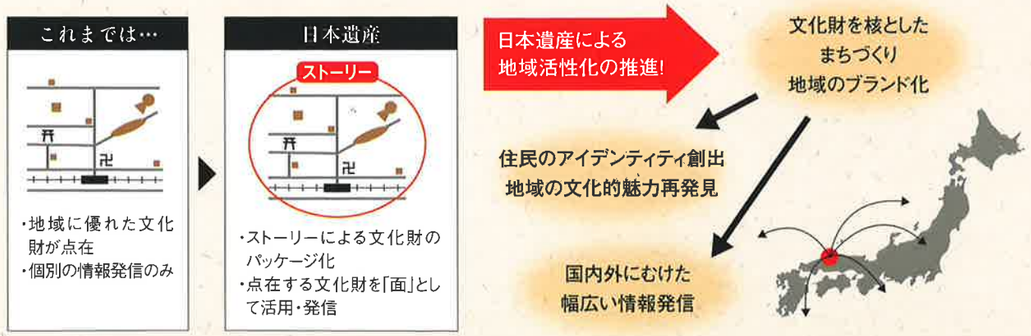
神話のふるさと出雲には、
太古より受け継がれてきた悠久の歴史・文化がある。
西を荒々しい日本海、東を穏やかな宍道湖、
そして南北を勇壮な山々に囲まれた出雲。
自然豊かなこの地に生きた人々、そしてこの地に引き寄せられ訪れた人々によって
広く、深く、鮮やかに紡いできた物語が、
ここ出雲の大きな魅力となった。

日本遺産「日が沈む聖地出雲～神が創り出した地の夕日を巡る～」
その物語をたどれば、壮大な神話と祈りの歴史を感じることだろう。
出雲の夕日はただ美しいだけではない。
歴史に裏付けられ、今昔の文化と深く関わり合った、特別な夕日なのである。

日本遺産 Japan Heritage とは？

日本遺産

日本遺産は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するものです。
ストーリーを語る上で欠かせない魅力あふれる有形・無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。



日本遺産のストーリー

薗の長浜

神が創り出した海岸線

『出雲国風土記』の「国引き神話」では、出雲平野の北にそびえる山塊と西を縁取る砂浜は、巨大な神ヤツカミズオミヅヌが、海の彼方から引き寄せた「国（土地）」と使った「綱」とされています。また、砂浜と山塊の境に位置する浜は、オオクニヌシが高天原の使者タケミカヅチと会見して、国を譲り渡すことを承諾した『古事記』の「国譲り神話」の舞台として知られています。

西方の海に弓なりに開くこの海岸線は、滑らかな砂浜から岩肌がむき出しの荒磯へとダイナミックに変化し、まさに神業によると例えるにふさわしい景観です。

奈良時代に「伊那佐之小浜」や「出雲御埼山」と記されたこの海岸線は、今ではそれぞれ「稲佐の浜」や「日御碕」の名で親しまれており、いずれも日本海に沈む夕日の絶景エリアとして人々に愛されています。

しかし、出雲の人々がいにしえからこの地で日の入りにちなんだお社である「天日隅宮」と「日沉宮」を祀り、夕日に畏敬の念を抱いていたことはあまり知られていません。

関連する構成文化財

- 『出雲国風土記』
- 稲佐の浜
- 薗の長浜
- 長浜神社
- 日御碕
- 天日隅宮（出雲大社本殿ほか）
- 日沉宮（日御碕神社）

長浜神社

神戸川河口

出雲大社

稲佐の浜の夕日と「天日隅宮」

夕暮れ時の稲佐の浜に立つと、紅に染まる空が渚にたたずむ弁天島のシルエットを際立たせる幻想的な光景が広がります。また、弁天島より南では見渡す限りの夕焼け空と、海に溶け込む茜色の光が織りなす大パノラマを体感できます。

稲佐の浜から薗の長浜にかけて南北約10kmにわたる砂浜は、かつて西へ開いた出雲の海の玄関口として多くの船や人を迎えました。「国譲り神話」の舞台となったのは北端の稲佐の浜で、この弁天島がある辺りと言い伝えられています。ここでオオクニヌシは自身が住むための宮を築くことを条件に国譲りを承諾しました。この宮が浜から東へ1kmほど離れた出雲大社であり、『日本書紀』では「天日隅宮」と記されています。その名称から、この地がかつて日が沈む聖地として認識されていたことがうかがえます。

今でも旧暦10月10日には日没を待って、全国から参集される八百万の神々を出雲大社の神職がお迎えする「神迎神事」がこの稲佐の浜で執り行われています。太古から変わらない日の入りへの思いは、今日まで連綿と受け継がれています。

関連する構成文化財

- 稲佐の浜
- 薗の長浜
- 神戸川河口
- 天日隅宮（出雲大社本殿ほか）
- 神迎神事
- 上宮
- 屏風岩
- 大土地神楽

稲佐の浜

日御碕神社（日沉宮）

日御碕の夕日と「日沉宮（ひしずみのみや）」

日御碕の海岸線は、奇岩や絶壁が複雑に入り組む荒々しい景観を呈しており、稲佐の浜とはまた異なった魅力のある夕日や景色を見ることができます。平安時代初期、画聖の巨勢金岡（こせのかなおか）は、この海岸線にある島の一つを絵にしようとしましたが、朝夕刻々と変化する美しさをついに描ききれず絵筆を投げたそうです。その島は「筆投島（ふでなげじま）」と名付けられ、当時のエピソードを今に伝えています。

日御碕の名が示すとおり、古くから「日」に縁がある岬として広く知られていたこの地には、明治時代に出雲日御碕灯台が建設され、白亜の灯台が立つ今日の美しい風景が整いました。日御碕を訪れると、灯台越しに海に沈む夕日が、次々に打ち寄せる波頭や海に浮かぶ岩礁を赤く染める、絵画のような景色を観賞することができます。

日御碕の西側にはたくさんの経巻（きょうかん）が固まってできたという伝承が残る経島（ふみしま）があります。春先から夏にかけては、島の上を飛び交うウミネコのシルエットが夕日の美しさに変化を加えます。また、毎年８月７日には、日御碕神社の神職によって夕日を背景にした「神幸（みゆき）神事」が執り行われます。

日御碕神社にはアマテラスを祭神とする日沉宮とスサノオを祀る神（かみ）の宮（みや）があります。日の出の太陽に象徴されるアマテラスは、ここ出雲では日の入りの夕日に象徴され、江戸時代には、日沉宮は日が沈む聖地の宮と称されるようになります。

さらに、南東の高台に鎮座する月読社（つきよみしゃ）にはツクヨミが祀られています。アマテラスと対をなす神とされ、スサノオを含めて三貴子（さんきし）と称されるツクヨミもまた、この地の夕日を見守っています。

関連する構成文化財

- 日御碕
- 筆投島
- つぶて岩
- 出雲日御碕灯台
- 経島ウミネコ繁殖地
- 日沉宮（日御碕神社）
- 『出雲国風土記』日御碕神社本
- 白糸威鎧
- 神幸神事
- 月読社

経島

出雲日御碕灯台

猪目洞窟

日が沈む聖地 出雲

古代、政権の中心であった大和から見ると、太陽は北西の出雲に沈みます。このことから出雲は「日が沈む海の彼方の異界につながる地」として認識されたと考えられます。中央で編まれた『古事記』や『日本書紀』で、出雲が「黄泉国（よみのくに）」と「地上世界」をつなぐ地として描かれているのは、古代の人々が出雲を「日が沈む地」とイメージしていたことに端を発するのかもしれません。

今日も出雲では夕暮れ時の挨拶として「ばんじまして」という方言が使われています。他の地域ではあまり耳にしない「こんにちは」と「こんばんは」の間を結ぶ挨拶で、夕刻に格別な思いを抱く出雲の人々の心情が垣間見えます。

穏やかな表情や荒々しい姿を見せる海岸線。それを舞台に圧倒的な存在感を示す夕日。両者が織りなす美しい夕景は神により創り出されたとこの地に生きた人々は感じてきたことでしょう。出雲の海岸線に立って海に沈む美しい夕日に祈り、出雲神話にちなんだ神社や登場地を巡ると、日が沈む聖地出雲の祈りの歴史を体感することができます。

関連する構成文化財

- 猪目洞窟遺物包含層
- 宇龍
- 権現島（熊野神社）
- 鷺浦

宇龍

鷺浦

構成文化財—ストーリーを彩る23の文化財

	構成文化財	ストーリーの位置付け	指定等
1	稲佐の浜	夕日の絶景地、出雲神話の舞台	
2	屏風岩	国譲り交渉の伝承地	
3	出雲国風土記（日御碕神社本）	ほぼ完本で残る、1300年前の地誌	県指定文化財
4	薗の長浜	国引きの綱に見立てられた砂浜	
5	長浜神社	国引きの神を祀る宮	
6	神戸川河口	いにしえの出雲の海の玄関口	
7	出雲大社本殿ほか	日が沈む聖地の宮「天日隅宮」	国宝・国指定重要文化財・国登録文化財
8	神迎神事	八百万の神を迎える、神在月はじまりの神事	
9	上宮	縁を結ぶ「神議り」の舞台	県指定文化財
10	大土地神楽	夕日を背に舞う、伝統の技	国指定重要無形民俗文化財
11	日御碕	荒々しい岩肌連なる海岸線	
12	筆投島	絵師が筆を投げるほどの美しい夕景	
13	つぶて岩	国譲り神話伝承地	
14	日御碕神社社殿	日が沈む聖地の宮「日沉宮」	国指定重要文化財
15	月読社	山中にひっそり佇む、三貴子・ツクヨミの社	
16	白糸威鎧	日御碕神社の威勢を示す国宝	国宝
17	経島ウミネコ繁殖地	ウミネコ集う神域の島	国指定天然記念物
18	神幸神事	経島を舞台に執り行われる夕日の祭り	
19	出雲日御碕灯台	海の安全を守る白亜の石造灯台	国登録文化財
20	宇龍	北前船を迎えた、山陰屈指の貿易港	
21	権現島（熊野神社）	ウミネコの故事が残る和布刈神事の舞台	
22	鷺浦	北前船寄港地の風情が残る港町	
23	猪目洞窟遺物包含層	「黄泉の坂・黄泉の穴」と伝わる洞窟	国指定史跡

関連する文化財など

A 弁天島　B 鯨島　C 県内初の海水浴場　D 因佐神社　E 国譲り神話　F 国引き神話
G 奉納山　H 原始古代の出雲平野　I お忌みさん　J 下宮　K 出雲神楽　L ひろげ遺跡
M 高天原古墳（高天原遺跡）　N 隠ケ丘　O 三貴子の誕生　P 和布刈神事　Q 権現祭り（鷺浦）

1 稲佐の浜

『古事記』『日本書紀』に書かれた「国譲り神話」の舞台。

出雲大社から西へ約1kmまっすぐ進むと、白い砂浜が眼前に広がる。浜の北寄りにあるのが「弁天島」。海、砂浜、弁天島、そして夕日が織りなす幻想的な風景は、言葉にできない絶景だ。

日本遺産「日が沈む聖地出雲」の中心となるこの浜の夕暮れは、昔も今も人々を惹きつける。

Ⓐ 弁天島

稲佐の浜の北寄りにあり、こんもりとしたシルエットが特徴。島にはトヨタマヒコ（ワタツミノカミ＝海の神）が祀られている。弁天島の名の由来は、神仏習合の時代に祀られていた弁財天。かつてははるか沖にあったといい、「沖御前」の異名をもつ。

Ⓑ 砂に埋もれた「鯨島」

弁天島の手前にあった鯨島。昭和の初めから稲佐の浜一日御碕間を結ぶ、定期観光船乗り場だったが、今は砂に埋もれ、その姿を見ることはできない。

明治末期の海水浴場（提供：個人）

「養神保寿」の石碑

Ⓒ 県内初の海水浴場

明治 21 年（1888）、陸軍軍医だった松本順氏の山陰漫遊を機に、島根県内初の海水浴場となった。明治 36 年（1903）には創設記念に「養神保寿」の石碑が建てられた。かの小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）もこの地を愛し、半月もの間滞在して海水浴を楽しんだという。

2 屏風岩

稲佐の浜から北東へ進むと、屏風を立てたような大岩が姿を現す。この「屏風岩」の陰で、オオクニヌシとタケミカヅチが国譲りの話し合いをしたという伝承が残る。

Ⓓ 因佐神社

屏風岩の北にあり、国譲り神話に登場するタケミカヅチを主祭神とするお社。『出雲国風土記』にも「伊奈佐乃社」として記載されている。出雲大社境外社。

神話でひもとく日本遺産

国譲り神話

日本最古の歴史書に記された出雲

―『古事記』『日本書紀』の「国譲り神話」Ⓔ

出雲大社境内の「ムスビの御神像」

●古事記と日本書紀

古事記	国の始まりから33代推古天皇に至るまでの歴史を物語風に記述。壬申の乱（672）を経て即位した天武天皇は、それ以前にまとめられた『帝紀』『旧辞』や諸豪族が持っていた史料を整理し、正説を伝えようと発起した。稗田阿礼に内容の暗記・詠唱、太安万侶に記録・編纂を担当させ、和銅5年（712）に完成した。全3巻で、出雲を舞台とした神話は主に上巻に記される。
日本書紀	養老4年（720）完成の日本最古の正史。全30巻（系図1巻は現存せず）。発起人は天武天皇。皇族や官人が編纂を進め、舎人親王によって完成された。古事記と同じく、国の始まりから天皇家の歴史（持統天皇まで）を記すが、出来事を年代にそって漢文体で記述する。初代神武天皇以前の神代を記述した第1・2巻に、出雲を舞台とした神話が登場する。

古事記　国譲り神話

高天原を治めるアマテラスは、「オオクニヌシが治めている地上世界（葦原中ツ国）は、わが子のオシホミミが治めるべき国だ」と言い、統治権の譲渡を要求することとなった。

最初の使者アメノホヒは、オオクニヌシにつき従ってから3年経っても何の返事もしなかった。2人目の使者アメノワカヒコも、オオクニヌシの娘シタテルヒメと結婚して国譲りを要求しなかった。そこで、3人目の使者として**タケミカヅチを派遣した。**1

タケミカヅチはアメノトリフネを伴って稲佐の浜に降り、波打ち際に長い剣を逆さに立て、切っ先の上に胡坐をかいてオオクニヌシと談判した。オオクニヌシは「自分の一存では何とも答えられない。美保の碕で漁をしているわが子のコトシロヌシに聞いてくれ」と言った。コトシロヌシは「この国はアマテラスの御子に奉るのがいいでしょう」と答えたのち、のってきた船を踏み傾け逆手を打った。船はたちまち青い柴垣に変わり、コトシロヌシはその中に隠れてしまった。一方、オオクニヌシのもうひとりの子、**タケミナカタは国譲りに反対したが、タケミカヅチとの力比べに敗れ、諏訪湖（長野県）まで逃げてしまった。**2

ふたたびタケミカヅチがオオクニヌシに国譲りの意思を問うと、オオクニヌシは「私には何の異存もありません。ただひとつ、**国を譲るかわりに、私の住処として、高天原の大神の御殿と同じように、大磐の上に太い柱を立て、大空に千木が突き出ているような立派な宮を建ててほしい。」と願い出た。**3　そこでタケミカヅチは望みどおり、出雲国の多芸志の浜に立派な御殿を建てたのである。

（参考：島根県観光連盟『島根県観光事典』）

「大空に千木が突き出ているような」古代の出雲大社（模型）
（提供：島根県立古代出雲歴史博物館）

古事記とちょっと違う

日本書紀に描かれた国譲り神話はこう！

- その1　高天原から派遣されるのはタケミカヅチとフツヌシ。
- その2　タケミナカタは登場せず、力比べのエピソードは語られない。
- その3　国譲りの条件である宮の建設を高天原側が提案しオオクニヌシが受け入れている。

出雲国風土記
―国引き神話の世界へ

3 『出雲国風土記』（日御碕神社本）県指定文化財

和銅6年（713）、各国の産物、地理、地名の由来、伝承等をまとめた風土記撰進の命令が、全国に発令された。この官命を受け、天平5年（733）に完成したのが『出雲国風土記』である。今の島根県の東部にあたる出雲国を構成していた9つの郡について、地名、山野、海川、寺社や産物、さらには道程などを整然と紹介しており、多くの登場地は今もたどることができる。また、編纂責任者は一般的に今の県知事にあたる国司が務めるが、出雲国では出雲を代表する地方豪族「出雲臣」が務めたのも大きな特徴だ。

構成文化財の日御碕神社本は、約180冊残る写本のひとつ。寛永11年（1634）、尾張藩主徳川義直により日御碕神社に奉納された。その奥書には「全国に66巻あった風土記のうち、今に伝わるのは出雲国風土記1冊だけで、これは出雲が神国のあかしである。そのため、風土記は出雲の霊物なので、寄進する。――」と書かれている。

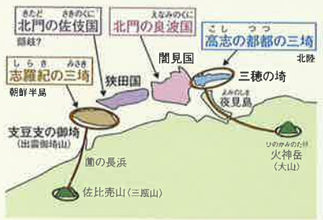
神話でひもとく日本遺産

国引き神話
―出雲国に伝わる国土創成神話 F

かつて、現在の島根半島はなく、出雲国はとても狭い国だった。それを憂いた巨大な神ヤツカミズオミヅヌが国土を広げようと周りを見渡し、海の向こうに土地の余りを見つけると、魚のエラをつくように鋤を突き立て、魚をさばくように土地を切り離し、綱を掛け、「国来、国来」の掛け声とともに船を引くように国を引き寄せた。支豆支の御埼、狭田国、闇見国、三穂の埼の4つの土地を国引きしてつなぎ合わせ、無事国土を広げると、意宇の森（現在の松江市大草町）に杖を突き立て、「（意恵＝終え）」と叫んだ。

『出雲国風土記』で最初に記される意宇郡（今の松江市周辺）の項の冒頭で、地名の由来を説明するために語られるのが「国引き神話」だ。

出雲には、この神話を彷彿とさせる地形が今も昔のまま残っている。支豆支の御埼（日御碕～弥山～旅伏山までの山塊）は今の朝鮮半島南部から国引きし、引くために使った綱が薗の長浜、綱を括りつけた杭が佐比売山（三瓶山）となったという。支豆支の御埼の中腹にある奉納山から眼下を望めば、今も、神話に語られた通りの光景が広がる。また、旅伏山西側の谷間は支豆支の御埼と狭田国の繋ぎ目に見立てられ、去豆の折絶と呼ばれている。



さらに、ヤツカミズオミヅヌが行う国引きの動きは、当時の人々の労働の様子を象徴的に示したものという見方もある。鋤を突き立てる＝土地開発、魚のエラをつく＝漁業、魚をさばく＝料理、などだ。国引き神話には、古代出雲人の土地への思い、労働への思いも込められているのかもしれない。

奉納山から観た薗の長浜

4 薗の長浜

「国引き神話」で、余った土地を引き寄せるための「綱」に例えられた砂浜。風土記には白砂の砂浜に松が生い茂っている様子が描かれ、地元の呼び方として「薗の松山」の名も紹介されている。松林の中程に長浜神社が鎮座する。

Ⓒ 奉納山

出雲大社から稲佐の浜に向かう途中にある小高い丘。近世の頃、出雲国を訪れた廻国聖（全国66ヵ国の聖地を巡り、一部ずつ法華経を納経した修行僧）が、この場所に経文を奉納したことが由来となっている。現在は公園として整備され、頂上の展望台からは国引き神話の舞台である薗の長浜と三瓶山を一望できる。

5 長浜神社

薗の長浜の中程に位置する妙見山に鎮座していることから、別名・妙見神社ともいう。

主祭神は「国引き」をおこなった巨大な神、ヤツカミズオミヅヌ。開国の神、産業の神のほか、勝負事の神として今も多くの崇敬を集めている。

■約2,000年前の出雲平野

■現在の出雲平野

かつては平野の東西に水域が広がっていた。

出雲の海の玄関口

6 神戸川河口（かんどがわかこう）

神戸川は、中国山地の琴引山（飯石郡飯南町）に源を発し、出雲平野を経て日本海に注ぐ主要河川。『出雲国風土記』には「神門川」とあり、当時、薗の長浜の東に広がっていた内湾「神門水海（かんどのみずうみ）」に注いでいた。神戸川河口は、この内湾の入り口だった場所だ。

出雲平野が現在のような平野になったのは江戸時代のことで、それまでは二大河川の斐伊川、神戸川とそこから派生した小河川、そして湿地が入り組む、水辺の多い平野だったことがわかっている。弥生時代以来、神戸川河口は、船に乗って出雲にやって来る様々な地域の人々を迎え入れた海の玄関口としての役割を担った。

原始古代の出雲平野 Ⓗ

出雲平野の成りたちと発展

現在の出雲市は、北の島根半島と南の中国山地の間に出雲平野が広がり、中国山地から流れ出た斐伊川と神戸川がそれぞれ宍道湖と日本海に注ぐ地勢だ。

約6,000年前（縄文時代前期）まで、島根半島と中国山地の間には古宍道湾が入りこみ、平野は存在していなかった。ところが約5,500年前（縄文時代中期）、そして約4,000年前（縄文時代後期）に三瓶山が噴火すると、神戸川の流れに乗って上流から大量の土砂がもたらされ、次第に平野部が形成されていった。約3,000年前（縄文時代晩期）には土地が安定し、少しずつ人々が進出しはじめた出雲平野は、弥生時代以降、豊かな生活・交流の場として発展していくことになる。

原始古代の交流

はるか昔の文字記録のない時代、人の交流を物語るのは遺跡から出土する“モノ”だ。海・川を介した交流が活発だった出雲では、約1,800年前頃（弥生時代後期）には九州や北陸、さらには中国大陸や朝鮮半島から様々なモノが運ばれたことが分かっており、広いネットワークをもった交流があったことを示してくれている。

1,800年前の東アジア世界

7 出雲大社本殿ほか

国宝（本殿）国指定重要文化財（素鵞社ほか20棟）
国登録文化財（彰古館）

出雲を象徴する神域、出雲大社。「国譲り神話」では、高天原の宮殿と並ぶ規模の本殿が建てられ、「天日隅宮」の名で呼ばれている。古代の歴史書に記されたこの名は、日の入りを神聖なものと考え敬った、当時の人々の思いを知ることができる貴重な一節だ。

本殿へと進む「下り参道」は全国的にも珍しい

出雲国大社之図

舞台は神在月の出雲大社。左上にはお忌み荒れの中、龍蛇神を先頭に到来する神々を描き、中央には神々が男女の名を書いた木札を結んで「縁結び」を行う様子を描く。文久２年(1862)二代 歌川国久画。

（所蔵：島根県立古代出雲歴史博物館）

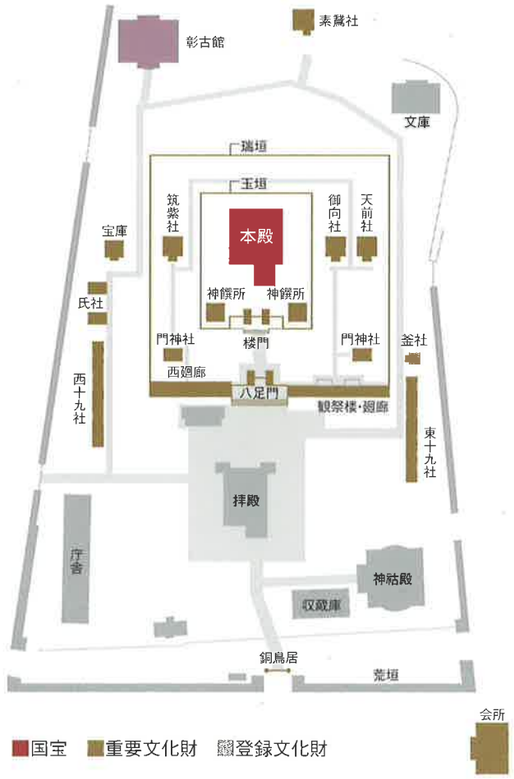
出雲国一宮　出雲大社

建造物

出雲大社境内には、国宝・本殿を筆頭に、国の重要文化財 21 棟、登録文化財 1 棟など、歴史的建造物が建ち並ぶ。

現在の境内は江戸時代前期の寛文７年(1667)の遷宮時に計画され、今も当時の建物が多く残る。また、本殿をはじめとする瑞垣内の建造物は次の延享元年（1744）の遷宮で造営された。

本殿は、「大社造」と呼ばれ、「神明造」（伊勢神宮）や「住吉造」（住吉大社）に並ぶ最古段階の神社建築様式だ。出雲大社のお膝元である出雲では、「大社造」の社殿をもつ神社が集中する。

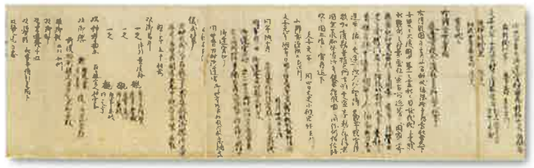


発掘された「心御柱」

平成12年(2000)、本殿前で３本の巨木を束ねた巨大柱の一部が出土した。「心御柱」は、本殿を支える９本柱の中心。鎌倉時代[宝治２年(1248)]の遷宮時に建てられたものとみられ、かつての本殿がいかに巨大だったか示してくれる。平成29年(2017)11月から出雲大社神祐殿で展示されている。
国指定重要文化財。

遷宮

本造建築である神社は、建物の老朽化に伴い一定の期間を定めて新しい社殿の造営や改修をおこなう必要がある。この時、清々しいところに祭神を移す遷宮がおこなわれる。出雲大社では、記録が明らかな平安時代後期［治暦３年（1067）］以降、本殿の転倒や焼失に伴って遷宮がおこなわれており、直近では平成 20 年（2008）から約 10 年にわたって本殿をはじめとする修理事業が「平成の大遷宮」として実施された。平成 25 年（2013）には、本殿遷座祭が約 60 年ぶりに執りおこなわれた。



（所蔵：個人　提供：島根県立古代出雲歴史博物館）

巨大本殿の遷宮次第〈杵築大社造営遷宮旧記注進〉

平安時代末期～宝治２年(1248、鎌倉時代)までの遷宮の記録を整然と記述する。建造から完成までの詳しい経過や、天仁３年(1110)に巨大柱100本が稲佐の浜に流れ着いたという記録も登場。
国指定重要文化財「出雲国造北島家文書」のひとつ。

天日隅宮

「天日隅宮」の名称は、国譲りの様子を描いた『日本書紀』神代下第９段の「一書」に登場する。

高天原

「あなたの言うことはもっともです。あなたが治める地上世界は、わが子孫(アマテラスの子孫)が治めます。あなたは神事を治めなさい。その替わり、あなたが住む「天日隅宮」は、千尋の栲縄で百八十紐に結び、柱は高く太く、板は広く厚くしましょう。あなたが海に出るための橋や船を造りましょう。百八十縫の白楯も作りましょう。また、天穂日命にあなたをお祀りさせましょう。」

オオクニヌシ

「天上の神の要請に従わずにおりましょうか。地上世界のことは、高天原の子孫が治めてください。私は退いて、幽事(神々の世界の事)を治めましょう。」

（『日本書紀』神代下 第９段）

8 神迎神事

旧暦10月10日の夕刻、稲佐の浜に御神火が焚かれ、出雲大社の神迎神事が執りおこなわれる。龍蛇神を使者として八百万の神々をお迎えする「神在祭」の幕開けである。一般的に「神無月」と呼ばれる旧暦10月を、全国から神々が参集する出雲では「神在月」と呼ぶ。

神事により迎えられた神々は、神在祭の1週間、出雲大社の十九社を宿とし、上宮（仮の宮）で男女の縁だけでなく様々なご縁を結ぶ「神議り」をおこなう。

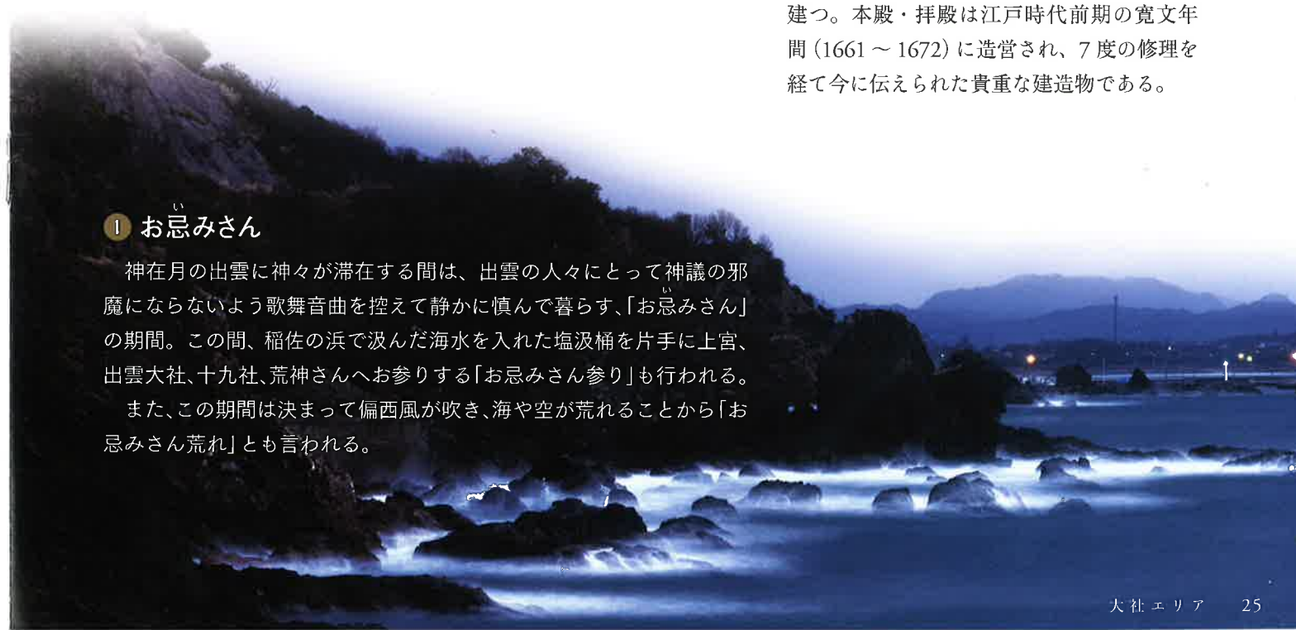
9 上宮　県指定文化財（本殿・拝殿）

出雲大社の西約1kmに鎮座する境外社で、祭神はスサノオと八百万神。旧暦10月10日の神迎神事でお迎えした八百万の神々は、11日から17日までの1週間、この上宮で様々な縁を結ぶ会議「神議り」をおこなうことから「仮の宮」とも呼ばれ、上宮が鎮座する地区の名前にもなっている。

境内には西から随神門、拝殿、本殿が並び建つ。本殿・拝殿は江戸時代前期の寛文年間（1661～1672）に造営され、7度の修理を経て今に伝えられた貴重な建造物である。

J 下宮

上宮から稲佐の浜に向って進む途中にある出雲大社の末社で、祭神はアマテラス。小さなお社が大きな岩に囲まれて建つ。



I お忌みさん

神在月の出雲に神々が滞在する間は、出雲の人々にとって神議の邪魔にならないよう歌舞音曲を控えて静かに慎んで暮らす、「お忌みさん」の期間。この間、稲佐の浜で汲んだ海水を入れた塩汲桶を片手に上宮、出雲大社、十九社、荒神さんへお参りする「お忌みさん参り」も行われる。

また、この期間は決まって偏西風が吹き、海や空が荒れることから「お忌みさん荒れ」とも言われる。

10 大土地神楽（おおどちかぐら） 国指定重要無形民俗文化財

古くは大土地荒神社の神主によって舞われていた神楽で、寛政5年（1793）の「神楽道具控帳」、同10年（1798）の「祷家（とうや）順番帳」などの記録によると、この頃から氏子達によって舞われていたことが確認できる。現在まで300年以上途絶えることなく、伝統の技と心を継承している。構成は典型的な出雲神楽。能舞の要素を含む舞振りや衣装、奏楽、鳴物は長い伝統を受け継ぐもので、島根半島一帯の神楽の中でも古い要素を数多くもつ。

大土地神楽保存会神楽方により、大土地荒神社、出雲大社の祭礼のほか、毎年5月下旬に開催する「夕刻篝火舞（ゆうこくかがりびまい）」では、稲佐の浜で海に沈む夕日を背景に勇壮な舞を披露し、好評を得ている。

大土地荒神社

「野見宿禰」★

「荒神」のオオクニヌシ★

「八戸」（稲佐の浜 夕刻篝火舞にて）

（★ 撮影：加島美知氏）

出雲神楽 K

「八戸」スサノオと大蛇の戦い★

中世末から近世初期にかけて、佐太（さだ）神社（松江市鹿島町）の神職を中心に確立された出雲地方の神楽。吉田神道（唯一神道）や能・狂言の要素を取り入れながら発展し、江戸時代には出雲地方一円に浸透した。素面で舞う神事的な舞「七座（しちざ）」を前段に、神話や縁起を素材とした着面の演劇舞「神能（しんのう）」を後段に固め、その間に祝福を意図する儀式的な舞「式三番」を挟むという構成が特徴。また、八調子の石見神楽に比べ、ゆったりとした六調子で舞われる。

出雲市内には多くの神楽団体があり、神社例祭での奉納をはじめ、様々な公演が活発におこなわれている。

「日本武」★

「日本武」の倭姫命★

11 日御碕（ひのみさき） 大山隠岐国立公園

稲佐の浜から北へ続く道を進むと、辺りの景観は平地から切り立った山肌とむき出しの岩盤が入り組む荒磯へ姿を変える。荒々しいながらも洗練された美しさを誇る景観は、島根半島の最西端に位置する日御碕の大きな特徴だ。

平安時代末期、後白河上皇が編纂した歌謡集『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』では、「聖（ひじり）の住所（すみか）」のひとつに日御碕の名が挙がり、古くから修験の道場として信仰を集めた場所だったことがわかる。

さえぎるものがない大パノラマが広がる夕日の名所でもあり、稲佐の浜と同じくストーリーの中心となる構成文化財である。

12 筆投島（ふでなげじま） 展望スポットあり

稲佐の浜から日御碕方面へ進むと、三角形に切り立った筆投島が見えてくる。

筆投島という名は、平安時代初期、画聖と呼ばれていた宮廷絵師・巨勢金岡（こせのかなおか）がこの島を写生しようとしたが、朝夕刻々と美しさが変化する姿をついに描ききれず筆を投げた、という伝承に由来する。

かつて島には松が生い茂った

Ⓛ ひろげ遺跡 見学不可

出雲大社から日御碕神社へ向かうルートのちょうど中程、トンネルを抜けた先の斜面にひろげ遺跡がある。弥生時代後期（3 世紀頃）から奈良時代（8 世紀）までの祭祀の場と考えられ、故意に割られた多数の土器片、浜から運ばれた石や桃の種が見つかっている。

13 つぶて岩 展望スポットあり

筆投島からさらに北へ進むと、眼下の沖に大きな岩が積み重なったような島が姿を現す。つぶて岩と呼ばれる不思議な島は、『古事記』に記された国譲り神話に由来する伝説がある。

高天原の使者・タケミカヅチと国譲りに反対するオオクニヌシの子・タケミナカタが力比べと称して稲佐の浜から岩を投げ合ったが、両者の力は互角で何回も同じところに落ち、今のような島ができたという。壮大な神話の光景を想像させるスポットのひとつだ。

Ⓜ 高天原（たかまがはら）古墳 見学不可

古墳時代後期（6 世紀）の土器が出土しており、かつては人が腰かけられるほどの大きな石があったため古墳と考えられているが、今はその痕跡も分からない。

高天原は、古代の書物の中で天上世界を意味する言葉。神話の世界を彷彿とさせる名前が地名として今も残るのが神秘的だ。

日沉宮（拝殿・幣殿・本殿）

14 日御碕神社

国指定重要文化財（日沉宮 社殿ほか13棟・2基）

朱色の社殿が鮮やかな日御碕神社は、『出雲国風土記』に「美佐伎社」、『延喜式』に「御碕社」の名で登場する古社。

平安時代末期の歌謡集『梁塵秘抄』には「聖の住所」として「日御碕」の名が登場する。戦国時代以降には、朝廷や幕府、大名の崇敬を集めた。

日御碕神社遠景

建造物　現在の社殿は江戸時代初期の寛永12年（1635）、江戸幕府3代将軍徳川家光の命により造営が始まり、同20年に竣工、翌21年に遷宮が行われたもので、修理を重ねながら現在まで受け継がれている。

楼門をくぐって入った境内には、右手に神の宮（上の宮）、正面に日沉宮（下の宮）が鎮座する。どちらも、本殿を拝殿・幣殿より高い位置に置くなど、高低差のある地形をうまく利用して建てられている。

楼門

日沉宮　アマテラスを祀る日沉宮は、もとは後方の沖に浮かぶ経島（よみしま）に鎮座しており、天暦2年（948）に村上天皇の勅により現在地に遷座されたと伝わる。「日沉宮」という名称は、日の出に象徴される太陽神アマテラスと日没の夕日を結びつける、出雲独自の視点を反映したもので、江戸時代までには「日沉宮＝日が沈む聖地に祀られた宮」というイメージが根付いていたようだ。江戸時代後期［天保4年（1833）］に記された『出雲神社巡拝記』の記載からは、伊勢で日の出を、出雲で日の入りを拝むと安泰だと信じられていたことが分かる。

ここもみどころ

日沉宮正面から右へ回り込むと高台があり、本殿を横から臨むことができる。妻部分には、中央に太陽、右に月、左に星と思われる美しい彫刻があしらわれていて、それぞれアマテラス、ツクヨミ、スサノオを表しているという。

神の宮　スサノオを祀る神の宮は、現社殿の後方にある隠ケ丘に鎮座していたものを、安寧天皇13年に現社地へ移したと伝わる。境内を見下ろす石垣の上に建ち、日沉宮と同規格だが、こちらが一回り小さい造りとなっている。

神の宮（本殿・幣殿・拝殿）

16 白糸威鎧（しろいとおどしよろい） 国宝

鎌倉時代末期から室町時代初期に製作され、日御碕神社に寄進された優品で、武将たちから崇敬を集めていた日御碕神社の威信を物語る社宝である。江戸時代には源頼朝寄進と伝えられ、老中松平定信が編集した古宝物図録集「集古十種」にも記載されるなど、著名な甲冑として知られていた。

文化2年（1805）、松江藩主松平治郷（不昧）の命で修理。明治37年（1904）に国宝に指定された。現在、実物は東京国立博物館に所蔵されている。平成7年（1995）には実物を調査し、復元品（左写真）が完成した。

復元品　明珍宗恭 作
所蔵：出雲文化伝承館

Ⓝ 隠ケ丘（かくれがおか） ―日御碕神社と「柏の葉」

かつて日御碕神社の神の宮が鎮座していた隠ケ丘は、神社から出雲日御碕灯台へ向かう途中にある小高い丘だ。ここが隠ケ丘と呼ばれ崇拝されるようになった由来が、日御碕神社で言い伝えられている。スサノオがヤマタノオロチを退治した後、地上世界の統治をオオクニヌシに譲り、「この柏葉がとまったところに我が魂を鎮めよう」と言って葉を投げられた。風に流され美佐伎の丘にとまり、スサノオはここを最後の地としてお隠れになったのだという。

驚くことに、この付近からは柏葉の化石が発見された。日御碕神社の神紋「三ツ柏（みつがしわ）」の由来となった神紋石として、今も境内に祀られている。

賽銭箱にも神紋「三ツ柏」が描かれている

15 月読社（つきよみしゃ）

日御碕神社南東の山中に、末社の「月読社」がひっそりと鎮座する。この神社の主祭神はツクヨミ。日御碕神社の2社の主祭神アマテラス、スサノオとともにイザナギから生まれた「三貴子（さんきし）」の一柱である。実は、この三貴子を近接して祀る神社は珍しく、島根県内にも数社しかない。

神話でひもとく日本遺産

三貴子（さんきし）の誕生

三貴子の誕生についての神話は、『古事記』に次のように記されている。

国生みの神の一柱、イザナミは、火の神・カグツチを産んだ時の火傷がもとで亡くなってしまう。最愛の妻が恋しくてたまらないイザナギは、イザナミを追って黄泉国（あの世）の御殿を訪問する。

イザナミは扉越しに、「すでに黄泉国の料理を食べたので元の世界に帰れないが、黄泉国の神と相談します。その間、私の姿を見てはいけません。」とイザナギに言う。ところが、イザナギは待ちきれず中を覗いてしまった。そこで見たのは、恐ろしく変わり果てたイザナミの姿。恐れおののいたイザナギが地上に向けて逃げ出すと、醜い姿を見られて怒ったイザナミと、その使い達が追い掛けてくる。

やっとの思いで追手を振り切り黄泉比良坂（よもつひらさか）にたどりついたイザナギは、巨大な岩で黄泉国の入り口をふさぐ。その岩を挟んで対峙したイザナギとイザナミ。怒りの収まらないイザナミが、「1日に千人ずつ、地上世界の人間を殺してやろう」と言うと、イザナギは「それでは1日に千五百の産屋を建てよう」と返す。これを境に、二柱の神は決別する。

その後、イザナギは禊をおこない、体を清めながら次々と新たな神を生んでいき、最後に顔を清めた時、左目からアマテラス、右目からツクヨミ、そして鼻からスサノオが生れる。イザナギは、特に美しく貴い三柱の神の誕生を喜び、アマテラスに天上世界（高天原）を、ツクヨミに夜の世界を、スサノオに海原を治めるよう命じた。

夕日に照らされた島とウミネコのシルエット

17 経島（ふみしま）（経島ウミネコ繁殖地）国指定天然記念物

日御碕神社の背後の沖に浮かぶ経島は、かつて『出雲国風土記』に「百枝槐社（もものえにす）」と記載された日沉宮が鎮座し、今は経島神社が祀られる。神域として、一般の立入りが禁じられている。切り立った流紋岩の柱状節理の岩盤が経巻を積み重ねたように見えることから、経島の名が付いたと伝わる。

また、毎年冬から春にかけて数千羽のウミネコが飛来する。日本海西部における一大繁殖地として、国の天然記念物に指定されており、出雲市では昭和46年（1971）から毎年ウミネコの生態調査を続けている。夏に飛び立つまでは、夕日に照らされた島と飛び交うウミネコのシルエットが美しい。

ウミネコの親子

18 神幸神事（みゆきしんじ）

アマテラスが鎮座された神蹟（しんせき）を慶賀する神事。旧暦7月7日（現在の8月7日）の夕刻、神の宮、日沉宮の順に神事を行い、日御碕神社の初代祭主であるアメノフキネの御魂（みたま）が神輿（みこし）に移される。その神輿とともに神職、参列者が行列を組み、日沉宮の旧社地である経島の対岸に位置する日和崎（ひわざき）のお旅所に向かい、神輿を経島に向け神職が祝詞を奏上。同時刻、神職が経島に渡り、経島神社でも神事が執り行われる。

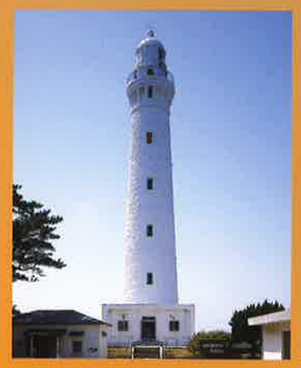
季節柄、神事の最中に夕日が沈むことから「夕日の祭り」とも呼ばれ、神事の厳かな雰囲気と相まって、幻想的な光景が広がる。

（撮影：武智正信氏）

19 出雲日御碕灯台（いずもひのみさきとうだい） 国登録文化財

日御碕神社から北へ、切り立った海岸線沿いを歩いていくと、空に向かって真っすぐにそびえる白亜の出雲日御碕灯台が姿を現す。地上約 44m、海抜約 63m の西洋式灯台で、石造りでは日本一の高さ。内部はレンガ積みの 2 重構造で地震にも強い。約 3 年の歳月をかけて建設され、明治 36 年（1903）から現在まで 100 年以上、海上の道標となる光を灯し続けている。平成 10 年（1998）には「世界の歴史的に特に重要な灯台 100 選」、平成 25 年（2013）には灯台と正門、石塀が国登録文化財となった。また、平成 29 年（2017）「恋する灯台」にも選ばれ観光スポットとしても注目されている。

静かに移り変わる夕映えは、次第に雄大な海と灯台を赤く染め上げていく。その佳景は、見る者の心をひきつけてやまない。



和布刈神事には漁船が寄る船橋が架かる

宇龍の町並み

海に面した熊野神社の鳥居

20 宇龍（うりゅう）

21 権現島（ごんげんじま）（熊野神社）

日御碕の東に位置する港町、宇龍。『出雲国風土記』には「宇礼保浦（うれほのうら）」とある。大型船が停泊できる良港として知られ、戦国時代には山陰地方屈指の貿易港となった。また江戸時代には日本海沿いを航行した北前船の風待港として栄え、船問屋など十数戸が軒を連ねた。大正期以降、出入りする船は大型から小型の漁船に変わり、現在の閑静な港町になっていった。

港の中央に浮かぶ権現島は、日御碕神社の末社、熊野神社が鎮座する島で、和布刈（めかり）神事が執りおこなわれる。

Ⓟ 和布刈（めかり）神事

日御碕神社の社伝によると、成務天皇６年、旧暦１月５日の早朝、１羽のウミネコが３度、潮のしたたる海藻をくわえて日御碕神社の欄干にかけて飛び去り、不思議に思った神職がその海藻を水で洗って神前に供えたところ、和布（わかめ）になったという。この故事にならって行われるのが和布刈神事である。

神事は、氏子を引き連れ権現島に渡った神職が、箱めがねで新しい和布を刈り上げるというもので、この神事が済まないうちには和布を刈ることはできないとされる。寒空の中、御渡の際には船歌が歌われ、水先人には地元の若者が下帯姿で奉仕することでも知られている。

名産の和布、そしてウミネコにまつわる日御碕ならではの神事である。

（撮影：藤原慧氏）

（撮影：古安宣夫氏）

22 鷺浦（さぎうら）

日御碕から高尾山を越えると鷺浦にたどり着く。鷺浦は湾が深く、湾口部の柏島が風よけの役割を果たした「天然の良港」である。江戸時代は宇龍に並ぶ北前船の寄港地として栄え、船宿が建ち並んだ。明治～大正時代には一時期、大阪商船の定期航路の港となり、鷺銅山の開発・発展もあって賑わった。賑わいが落ち着いた今でも、路地を入ると当時の風情が漂う歴史的町並みが残されている。

見事な鶴の鏝絵（こてえ）

歴史を感じる鷺浦の町並み

沖に浮かぶ柏島

Q 権現（ごんげん）祭り

鷺港の沖合にぽつんと浮かぶのは、『出雲国風土記』に脳嶋（なづきじま）と記された柏島（かしわじま）だ。鷺浦が天然の良港と言われる所以は、この島が打ち寄せる荒波の勢いを減じてくれるからともいわれる。

毎年７月末、豊漁と海の安全を願って行われるのが権現祭りである。夕刻、神職の祝詞ののち、地区の漁船が大量旗をなびかせ、列になって柏島の周りを一周し、柏島神社のほこらを拝む。船列が夕日に照らされ勇壮な姿をみせる。

夕日を背にした権現祭り

南海産の貝の腕輪
（出雲弥生の森博物館にて展示中）

木製の舟

猪目洞窟の全景

古墳時代の埋葬人骨
（出雲弥生の森博物館にて展示中）

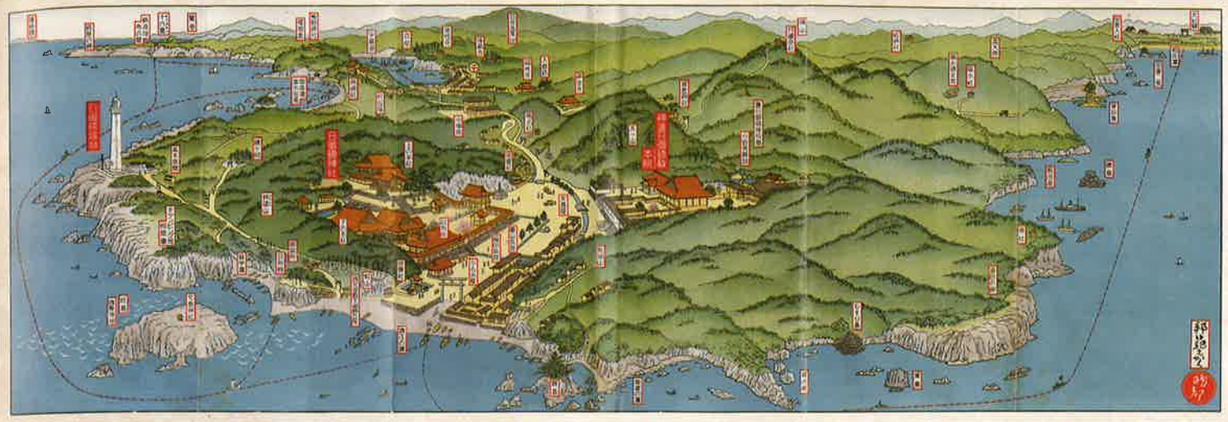
23 猪目洞窟（いのめどうくつ）

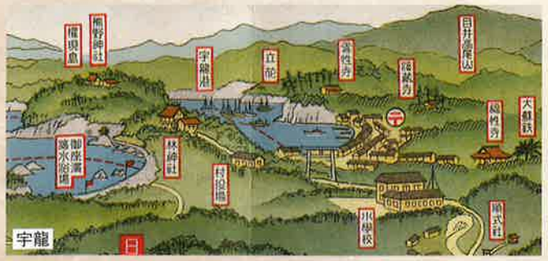
（猪目洞窟遺物包含層）国指定史跡
（猪目洞窟遺跡出土遺物）県指定文化財

「出雲郡宇賀郷（うかのさと）の磯に、黄泉（よみ）の坂・黄泉（よみ）の穴がある。夢でその磯に行ったものは必ず命を落とす――」

『出雲国風土記』には、背筋が凍るような一文がある。日本神話の世界は、大まかに神が暮らす天上世界（高天原）、人が暮らす地上世界（葦原中ツ国）と、死後の世界（黄泉国）に分けられる。神話が記された奈良時代、都である大和から見て日が沈む方角にある出雲は、黄泉の世界につながる場所と考えられていたようだ。

猪目洞窟遺跡は、この「黄泉の坂」のひとつに比定されている。弥生時代から古墳時代までの埋葬人骨や珍しい南海産の貝の腕輪、舟葬（しゅうそう）と思われる木舟などが見つかっている。『風土記』の記載の背景には、ここが「畏（おそ）れの場」である、といういにしえからの言い伝えがあったのだろう。





レトロな雰囲気漂う
昭和初期の日御碕案内

日御碕神社を中心に、旧大社駅から十六島、なんと隠岐島まで見渡す、壮大なスケールのイラストが興味深い。

日本遺産関連年表

縄文	弥生	古墳	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山
前4,000～前2,000		500 659	712 720 733	970 1102 1179	1248	1508 1532 1534 1566	1576
人々が暮らし始める 三瓶山噴火	猪目洞窟が埋葬地となる	ひろげ遺跡 高天原古墳 杵築大社造営（斉明紀）	「出雲国風土記」完成 「日本書紀」完成 「古事記」完成	出雲大社が日本一の規模と紹介される［口遊］ 他国で十月を「神無月」と呼び始める 日御碕が聖の住所と称される［梁塵秘抄］	出雲大社　宝治度遷宮 白糸威鎧　日御碕神社へ寄進	尼子氏　出雲国の支配権を確立 六十六部廻国聖　出雲大社に納経 毛利氏　出雲国を支配	出雲大社造営のため出雲国内に徳政令が出される

江戸								明治		大正	昭和	平成	
1609	1635	1667	1744	1793	1806	1809	1833	1881	1903		1953	2013	2017
出雲大社　慶長度遷宮	日御碕神社　現社殿造営	上宮　造営 出雲大社　寛文度遷宮	出雲大社　延享度遷宮	大土地神楽舞われ始める ［神楽道具控帳］	伊能忠敬　石見～出雲の海岸線を測量	出雲大社　文化度遷宮	［出雲神社巡拝記］完成	出雲大社　明治度遷宮	稲佐の浜　県内初の海水浴場に 出雲日御碕灯台竣工		出雲大社　昭和度遷宮	出雲大社　平成の大遷宮	日本遺産認定

出雲市 観光スポット

神話に彩られた街・出雲は、その長い歩みの中で独自の文化を紡いできました。社寺、遺跡等、古代から近代までの歴史ロマン漂う観光スポットが多数存在しています。
また、その文化を育んだ自然豊かな出雲平野の美しい風景も見どころの一つです。
日本遺産だけに留まらない出雲の魅力に触れてみてはいかがでしょうか？

飛行機で
出雲縁結び空港発着

JRで

出雲市駅 ―特急やくも 3時間― 岡山駅 ―新幹線―
- 3時間30分 東京駅
- 45分 新大阪駅
- 1時間40分 博多駅

出雲市駅 ―寝台列車サンライズ出雲 12時間― 東京駅

高速バスで（出雲市駅発着）

東京	1日1便▶約12時間10分
名古屋	1日1便▶約10時間
京都	1日3便▶約5時間50分
大阪	1日13便▶約5時間40分
神戸	1日4便▶約5時間20分
岡山	1日9便▶約4時間
広島	1日9便▶約3時間10分
福岡	1日1便▶約9時間

旧大社駅
明治45年から平成2年まで営業。大正13年に建築された駅舎は国の重要文化財に指定されています。

❶ 神門通り
出雲大社へと通ずる、参拝客で賑わう道。出雲そばや出雲ぜんざいなどのお店が並びます。

❸ 出雲文化伝承館
大地主の家屋と庭園を移転した施設。築地松・出雲流庭園など出雲の文化が体感できます。

❹ 斐伊川
船通山を源流とし、出雲平野を流れ宍道湖に注ぐ川。八岐大蛇伝説と深い関わりがあります。

一畑電車
出雲・大社・松江を結ぶローカル線。美しい宍道湖を背景に、レトロな電車が走ります。

❺ マリンタラソ出雲
タラソテラピー（海洋療法）を提供するリラクゼーション施設。宿泊ルームからの夕日は絶景。

❼ 出西窯
「出西ブルー」と呼ばれる瑠璃色が美しい、シンプルで味わい深い器で知られています。

❽ 万九千神社
神在月に出雲に集まった全国八百万の神々が去っていく「神等去出祭」がおこなわれます。

❻ 道の駅キララ多伎
地元特産いちじくを使った商品が人気の、"夕日が見える道の駅"。
夏にはキララビーチの海水浴客で賑わいます。

❷ 島根県立 古代出雲歴史博物館
宇豆柱や、高くそびえていた古代出雲大社本殿の模型、国宝の銅剣・銅鐸（荒神谷遺跡）などを展示。出雲大社とあわせて訪れたい施設です。

木綿街道
江戸時代の商家の町並みを現代に残す街道。木綿取引で栄えた地であるため、この名が付いています。

一畑薬師
「目のお薬師さま」として全国的に信仰される臨済宗の古刹。千百年の歴史ある薬師信仰の総本山です。

鰐淵寺
武蔵坊弁慶伝説が残る天台宗の古刹。境内は国の史跡に指定されています。紅葉スポットとしても高い人気を誇ります。

神西湖
湖畔をヨシやガマが緑取る風光明媚な湖。粒身の大きいシジミが良く獲れます。

立久恵峡
そそり立つ奇岩、老松・古木が織り成す絶景。四季折々の美しさで見る者を楽しませます。

須佐神社
スサノオの御魂を祀る神社。近年ではパワースポットとして注目されています。

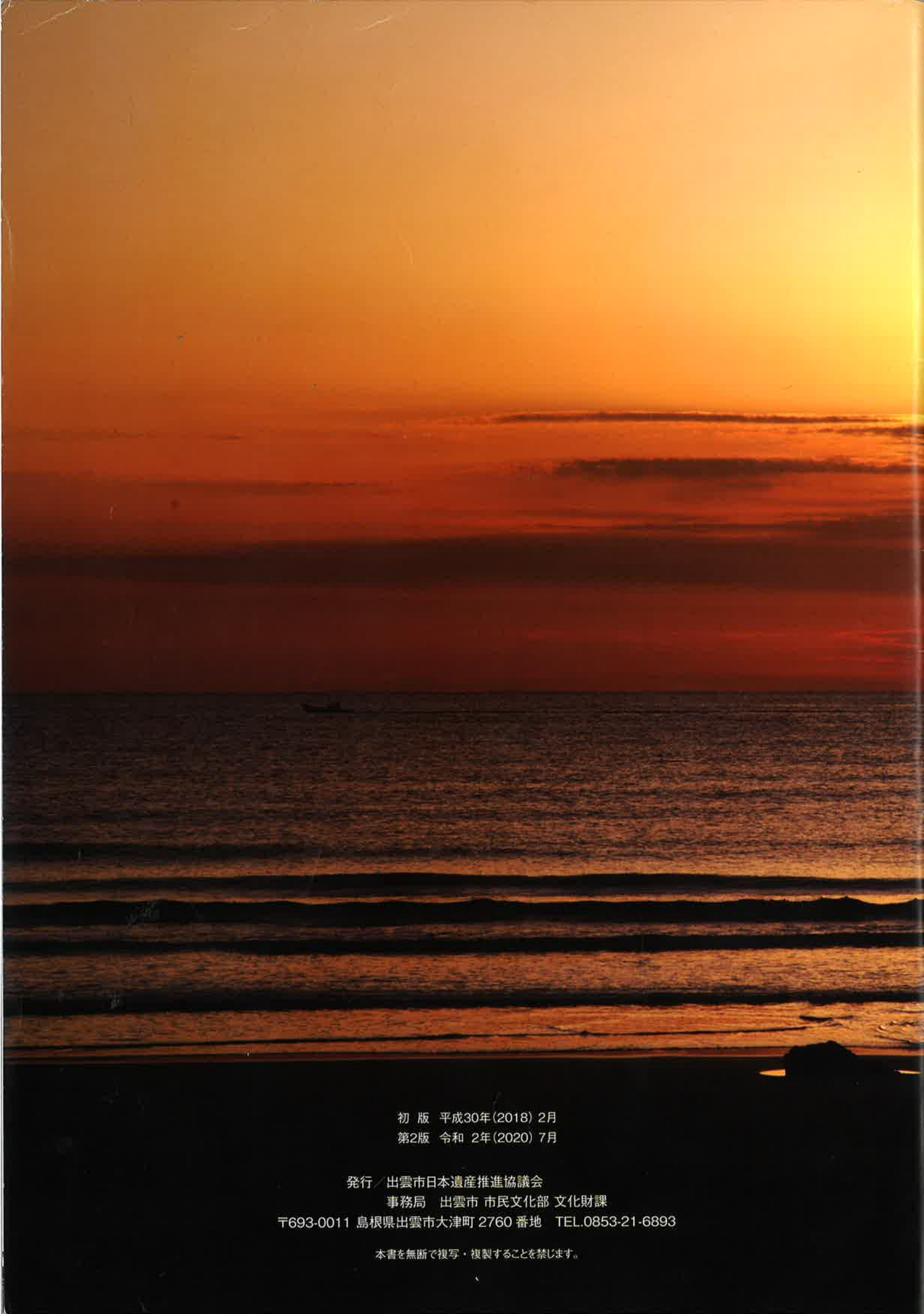
八雲風穴
夏でも10度前後の冷たい風で満たされています。夏には天然の涼を求めて多くの人が訪れます。

出雲弥生の森博物館・西谷墳墓群
西谷墳墓群は、弥生時代の出雲王が眠る墓。博物館では、王墓のジオラマやガラス勾玉・腕輪のほか、市内遺跡の出土品を展示しています。

荒神谷史跡公園・荒神谷博物館
昭和58年に358本の銅剣や銅鐸、銅矛が出土した荒神谷遺跡。博物館では、謎多き荒神谷を知ることができます。

❾道の駅湯の川
名湯「湯の川温泉」から引いた足湯、地元特産出西生姜を用いた料理などが楽しめます。

築地松
切りそろえた高い松の木で家屋を囲んだ出雲地方独特の防風林です。



初 版　平成30年(2018) 2月
第2版　令和 2年(2020) 7月

発行／出雲市日本遺産推進協議会
事務局　出雲市 市民文化部 文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地　TEL.0853-21-6893

本書を無断で複写・複製することを禁じます。